

夢みる力——未来への飛翔 ロシア現代アートの世界

会期	2019年8月4日(日)~10月27日(日)
開館時間	平日10:00~17:00 土曜・休前日9:30~19:00 日曜・休日9:30~18:00 最終入館は閉館時間30分前まで
休館日	月曜日(休日の場合、翌平日)
料金	一般：800円(700円)、65歳以上の方・大高生：600円(500円) ()内は20名以上の団体料金。 中学生以下・障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料。
主催	市原湖畔美術館 [指定管理者：(株)アートフロントギャラリー]



レオニート・チシコフ／祖先の訪問のための手編みの宇宙ロケット



展覧会について

この度、市原湖畔美術館では、鴻野わか菜氏をゲストキュレーターに迎え、ロシア現代アーティスト6名によるグループ展を開催いたします。

2019年は、ソ連の月探査機が月の裏側の撮影に初めて成功してから60周年、人類の月面着陸から50周年にあたります。今なお宇宙は人類希望の空間であり続け、私たちは宇宙を追い求めています。このような宇宙と人類の関係は、20世紀美術全体の課題でもあり、とりわけロシアの美術、文学、哲学は、様々な政治情勢の変化のなかで、つねに「ここではないどこか」を目指し、宇宙への憧憬、ユートピアの創造といった未知の世界への冒険の夢を通じて、未来への思いを表現してきたといえます。

本展では、インスタレーション、ドローイング、映像などのロシア現代アートの先端的な作品を通じて、「ロシア文化がいかに宇宙的なものを追求してきたか」という歴史と現在を示すと同時に、人類における宇宙の意味について問いかけ、その応答を試みます。

また幻想的な展示空間からは、宇宙や未知の世界を希求してきた人類の夢を想起し、広大な世界とのつながりを実感することでしょう。本展がアートと人間の「夢みる力」を体感する場となることを期待します。

参加作家（50音順）：

ニキータ・アレクセーエフ、アリョーナ・イワノワ＝ヨハンソン、
レオニート・チシコフ、ウラジーミル・ナセトキン、ターニャ・バダニナ、
アレクサンドル・ポノマリョフ

本展のみどころ

日常のなかの宇宙

不可能を可能にしようとする夢みる力によって、人間は空を飛び、宇宙にロケットを打ち上げ、極地への探検を続けてきました。その一方で、人間は日常の世界に身体をとどめながらも、空想の中で異世界を旅することができます。パスタという身近な素材を用いて宇宙ステーションを表現した作品「ラドミール」や、月と子供が友達になるという夢のような物語を描いた絵本『かぜをひいたおつきさま』の原画などを通じて、日常の中にある宇宙への繋がりを見出すことから本展は出発します。

子供も大人も楽しめる体験型展

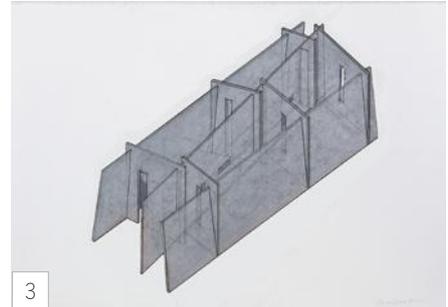
水上の遊歩道を旅するように歩きながら極地の映像を鑑賞する作品「ナルシス」、湖畔に設置された迷路のようなオブジェをさまよいつつ、空や湖や鏡に映る自分自身の姿を眺める作品「空を見よ、自分を見よ」をはじめとする、大規模なインタラクティブ作品が本展に登場します。これらの作品は、未知の世界の体感、世界における自分の姿を見つめ直す場となるだけでなく、子どもたちの好奇心や冒険への憧れを掻き立てることでしょう。

宇宙を夢みて・極地を旅して

「人間が宇宙をいかに夢みてきたか」を追求する本展では、南極もまた大きな主題となっています。南極と宇宙は、ともに、どの国家にも属していない巨大な公共空間であり、人類の未来に大きな可能性と影響力を持ち、到達し難い空間として人々の夢をかきたてます。本展では、ポノマリョフをコミッショナーに、12年間の構想期間を経て2017年3月に実現した世界初の南極ビエンナーレにも焦点を当て、公共空間における人類の協働、自然と人間の関わりについても考察します。



出展作品



1.レオニート・チシコフ「月の訪れ」／2.ニキータ・アレクセーエフ「岸辺の夜」／3.ウラジーミル・ナセトキン「空を見よ、自分を見よ」／4.アレクサンドル・ポノマリョフ「ナルシス」／5.レオニート・チシコフ「ラドミール」／6.ターニャ・バダニナ「空への階段」／7.ターニャ・バダニナ「翼」／8.アリューナ・イワノワ＝ヨハンソン「古典元素の探究者たち」



参加作家略歴



ニキータ・アレクセーエフ (Nikita Alexeev)

1953年、モスクワ生まれ／在住。1960～80年代にかけてソ連非公認芸術家として活動し、70年代半ばより、郊外でパフォーマンスを行う〈集団行為〉の活動をアンドレイ・モナスティルスキーらと共に展開。代表作に、日本の伝承「箒木」に基づいた連作ドローイングがある。ソ連では60～80年代にかけて日本文化がブームとなり、多くのソ連人が日本への「精神的な亡命(内的亡命)」をソ連の過酷な日常を乗り切る手段としていた。アレクセーエフも日本文化に傾倒し、自伝的著書『記憶の連なり』、『箒木を求めて』等にも日本の古典・宗教・文化・伝承についての言及を多数行う。「北アルプス国際芸術祭 2017」参加作家。

本展では、9.2mの長さの屏風状作品「岸边の夜」を展示する。



アリーナ・イワノワ=ヨハンソン (Alena Ivanova-Johanson)

1976年、エリスタ(旧ソ連)生まれ／モスクワ在住。1988年に国立北オセチア大学(専攻は遺伝学)、2008年にモスクワ印刷大学を卒業。2011年頃から、コンスタンチン・ズヴェズダチョーフ、アレクサンドル・ペトレリと共に映像等の制作を行う。ドローイング、ペインティング、映像、インスタレーション、装丁など多ジャンルで活躍。第1回南極ビエンナーレ・アートディレクター。

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018」では、「南極ビエンナーレ フラム号2」に参加。

本展では、南極ビエンナーレについての新作映画『古典元素の探究者たち』(2019)を日本初公開する。



レオニート・チシコフ (Leonid Tishkov)

1953年、ウラル山脈生まれ／モスクワ在住。医大在学中にユーゴスラヴィアの国際風刺画コンテストで金賞を受賞し、画家となることを決意。マカロニ、古着、角砂糖などの身近な素材を使ったオブジェ、心優しい生物を主人公にしたアーティスト・ブックや幻想文学、現代文学の挿絵、戯曲の執筆など、多ジャンルで活躍。

「いちほらアート×ミックス 2014、2017」では、旧里見小学校に松尾芭蕉、種田山頭火、ウィリアム・ブレイク、ガルシア・ロルからに捧げた月のオブジェを設置。「瀬戸内国際芸術祭 2019」参加作家。本展では、パスタを用いた作品「ラドミール」、古着をほどいて制作した「祖先の訪問のための手編みの宇宙ロケット」等を展示する。



ウラジーミル・ナセトキン (Vladimir Nasedkin)

1954年、スヴェルドロフスク県イヴデリ(旧ソ連)生まれ/モスクワ在住。1976年、国立ニージーニ・タギル教育大学芸術学部卒業。ロシア・アヴァンギャルドの主題を継承しつつ、それを新しい素材、技術を用いて表現することで、伝統と現代の融合を目指す。2000年代には国際共同アーティスト・イン・レジデンス「PIK」を主宰。2011年にはヴェニス・ビエンナーレで、詩人ヨシフ・プロツキーに捧げた版画展を、ポノマリョフのキュレーションで開催。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015」参加作家。本展では、迷路のような大型インスタレーション「空を見よ、自分を見よ」を展示する。

ターニャ・バダニナ (Tanya Badanina)

1955年、ニージーニ・タギル(旧ソ連)生まれ/モスクワ在住。「白」、「光」、「天への回帰」をテーマに、油彩、グラフィック、インスタレーション等を制作し、翼や白い衣服を主題とする作品を発表。バダニナは「白」が追悼、死の浄化、魂の解放、天使の色であるという。国際共同アーティスト・イン・レジデンス「PIK」に参加し、現地の紙を素材に制作した光の円柱のインスタレーションで話題を呼んだ。2013年にはヴェニス・ビエンナーレで、個展「1221 Amor」を開催。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015」参加作家。本展では、巨大なインスタレーション作品「翼」や新作ドローイング等を展示する。

アレクサンドル・ポノマリョフ (Alexander Ponomarev)

1957年、ドニエプロペトロフスク(旧ソ連)生まれ/モスクワ在住。1973年にオリョール美術学校を卒業した後、海への憧れを募らせ、オデッサ工科海洋大学(現:国立オデッサ海洋アカデミー)に入学。1979年から数年間、航海士として7つの海を旅し、1982年に美術界に戻り、現在に至るまで、海、船をテーマとする作品を展開。ヴェネツィア・ビエンナーレ、ヴェネツィア建築ビエンナーレでも多数プロジェクトを発表。2017年にはコミッショナーとして第1回南極ビエンナーレを実施し、現在、第2回南極ビエンナーレを準備中。「瀬戸内国際芸術祭2016」、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018」参加作家。本展では、大型インスタレーション作品「ナルシス」や新作ドローイングを展示する。



ゲストキュレーター

鴻野わか菜



1973年、広島生まれ。早稲田大学教育・総合科学学術院教授。東京外国語大学、東京大学大学院を経て、国立ロシア人文大学大学院修了（Ph.D）。専門はロシア文学・美術・文化。訳書にレオニート・チシコフ『かぜをひいたおつきさま』（徳間書店）、イリヤ・カバコフ『プロジェクト宮殿』（共訳、国書刊行会）、共著書に『幻のロシア絵本 1920-30年代』（淡交社）、『イリヤ・カバコフ世界図鑑——絵本と原画』（企画・監修：神奈川県立近代美術館）、『都市と芸術の「ロシア」——ペテルブルク、モスクワ、オデッサ巡遊』（水声社）など。ポノマリョフらと共に第1回南極ビエンナーレに参加。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018」の「南極ビエンナーレ フラム号2」など、現代ロシア作家のプロジェクトでコーディネーターを務める。

関連イベント情報

オープニング記念シンポジウム

「ロシア現代美術と彼方—南極・宇宙・ユートピア」

日時：8月4日（日）11：00 ～ 14：00

ゲスト：本展出展作家5名、鴻野わか菜（ゲストキュレーター）

モデレーター：北川フラム

定員：70名（事前申し込み制）

参加費：1,700円

※別途入館料がかかります。

※軽食の用意がございます。

※同時通訳有

※東京駅からのバスツアー有



関連イベント情報

ロシア映画上映会「宇宙の旅」

日時：8月25日（日）14:00～15:30

場所：市原湖畔美術館多目的ホール

モデレーター：鴻野わか菜（ゲストキュレーター）

定員：50名（先着順、事前申し込み制）

参加費：無料

※別途入館料がかかります。

協力：株式会社アイ・ヴィー・シー

【プログラム】

第一部 ロシア宇宙主義とソ連SF映画「宇宙飛行」

宇宙を求めてきたロシア文化の解説とともに、ワシーリー・ジュラヴリョフ監督「宇宙飛行」(1935年)を部分鑑賞します。

「宇宙飛行」は月旅行をテーマに、1935年に制作されたソ連SF映画です。宇宙ロケットの理論を発明し、「宇宙飛行の父」と呼ばれた宇宙物理学者コンスタンチン・ツィオルコフスキーを顧問に招いて、当時の宇宙科学の成果を反映させて制作されました。宇宙への憧れ、畏怖、希望を映し出した胸躍る宇宙冒険映画のもっともわくわくするエピソード(月到着の場面)を解説とともにご覧ください。

第二部 レオニート・チシコフの月と宇宙の短編フィルム

本展の参加作家であるレオニート・チシコフは、幻想的な月のオブジェ、宇宙人を思わせる奇妙な心優しい架空の生物を主人公とした物語などで知られる作家です。

ここでは、月の旅を主題とするロマンティックな短編映画や、チシコフの世界観、宇宙感を反映した本邦初公開の短編映画を鑑賞し、チシコフの世界について解説します。

レオニート・チシコフ「編み男」(2003年) 8分41秒 ※部分鑑賞

レオニート・チシコフ「地球人は宇宙へ」(2011年) 2分38秒

レオニート・チシコフ「月の旅」(2003-2016年) 4分04秒

レオニート・チシコフ「月の北極の旅」(2010年) 5分11秒

レオニート・チシコフ「雪の天使」(1998年) 3分54秒

第三部 ロシア現代アートの宇宙の短編フィルム

ロシア現代アーティストによる宇宙をテーマにした短編映画を鑑賞し、現代ロシア美術・アートフィルムにおける宇宙という主題の広がりや多様性についてお話しします。

アルカージー・ナソーフ「発射」(2002年) 4分24秒

アルカージー・ナソーフ「メガポリス 12月」(2014年) 3分14秒

セルゲイ・ソニン、エレナ・サモロードワ「戦略上重要な遺産」(2013年) 19分48秒 ※部分鑑賞

関連イベント情報

シンポジウム「夢みるカー—ロシア文化における宇宙と彼方」

日時：9月15日（日）14:00～16:00

場所：市原湖畔美術館多目的ホール

登壇者：沼野充義（ロシア東欧文化／東京大学教授）

高橋健一郎（ロシア音楽／札幌大学教授）

北川フラム（アートディレクター／市原湖畔美術館館長）

モデレーター：鴻野わか菜（本展ゲストキュレーター／早稲田大学教授）

参加費：1,500円

※別途入館料がかかります。

定員：70名（先着順、事前申し込み制）

【プログラム】

基調講演 沼野充義 「ロシア文化における宇宙」

基調講演 高橋健一郎 「ロシア音楽における宇宙」

ディスカッション・質疑応答

【登壇者略歴】

沼野充義



1954年／東京都生まれ。東京大学教養学部卒業。東京大学人文科学研究科ロシア語ロシア文学専攻修士課程修了。ハーバード大学芸術科学大学院博士過程にフルブライト給費留学生として留学。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授。2016年・2018年ハーバード大学世界文学研究所夏期集中セミナー客員教授。専攻はロシア文学・ポーランド文学、現代文芸論。主な著書は、『徹夜の塊 亡命文学論』（作品社、2002年、サントリー学芸賞）、『徹夜の塊 ユートピア文学論』（作品社、2003年、読売文学賞受賞）など。

高橋健一郎



1972年／札幌市生まれ。東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士、博士（学術）。ロシア人文大学留学。専門はロシアの言語と音楽。著書に『アレクサンドル・プロコフィエフ 忘れられた天才作曲家』（東洋書店、2011年）、『ロシア・アヴァンギャルドの宇宙論的音楽論：言語・美術・音楽をつらぬく四次元思想』（水声社、2019年）など。現在、札幌大学地域共創学群教授、日本アレクスキエ教会副会長。



北川フラム



撮影：山本マオ

1946年／新潟県生まれ。東京藝術大学美術学部卒業。主なプロデュースとして、「アントニオ・ガウディ展」、「アパルトヘイト否!国際美術展」、「ファーレ立川アートプロジェクト」等。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(2000~)、「瀬戸内国際芸術祭」(2010~)、のほか2020年市原市を舞台に開催される「房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス2020」の総合ディレクターを務める。柴綬褒賞(2016)、朝日賞(2017)、文化功労者(2018)受賞。

鴻野わか菜



1973年／横浜市生まれ。東京外国語大学卒業。東京大学人文科学研究科修了、博士(文学)。ロシア人文大学大学院修了(Ph.D)。早稲田大学教育・総合科学学術院教授。第1回南極ビエンナーレ参加研究者。専門はロシア文学・美術・文化。訳書にレオニート・チシコフ『かぜをひいたおつきさま』(徳間書店、2014年)、共訳書に沼野充義編著『イリヤ・カバコフの芸術』(五柳書院、1999年)、共著書に『幻のロシア絵本 1920-30年代』(淡交社、2004年)など。

「ロシア・デイ」美術館がロシアになる日!

日時：9月28日(土) 10:00~17:00

場所：市原湖畔美術館

【アクティビティ】 ぬりえ体験

時間：14:00~17:00(最終受付 16:30)

場所：多目的ホール

参加費：1枚につき50円(別途要入館料)

【ワークショップ】 パスタで宇宙都市を作ろう!

時間：10:00~13:00(最終受付12:30)

参加費：500円(別途要入館料)

【ギャラリートーク】 ゲストキュレーターの鴻野わか菜さんによるギャラリートーク

時間：①11:00~/②15:00~(各回30分)

集合場所：企画展示室入り口

参加費：無料(別途要入館料)

※この他にも、多数お楽しみいただける催し開催いたします。

※詳細は、決まり次第、HPにてお知らせいたします。



アクセス

所在地：〒290-0554 千葉県市原市不入75-1

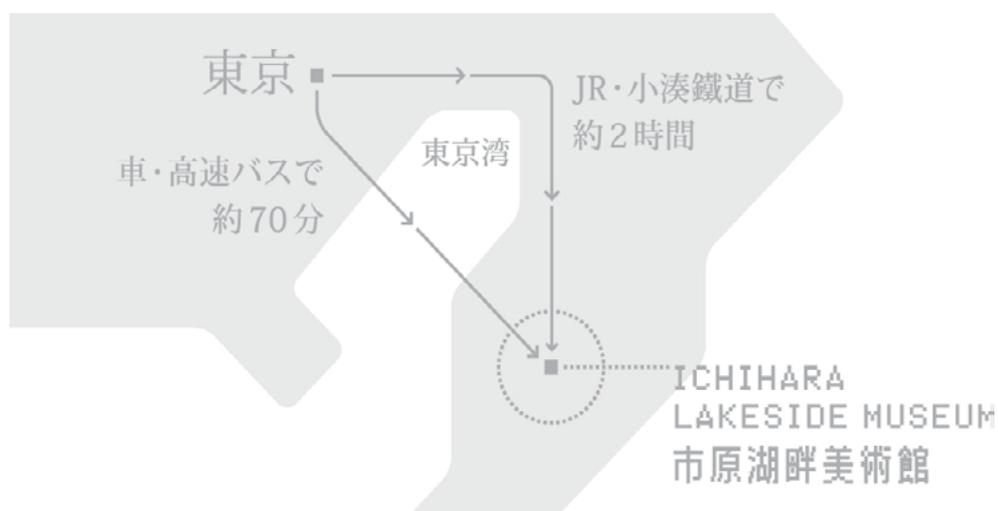
鉄道で：JR 内房線五井駅乗り換え 小湊鉄道「高滝」駅より徒歩20分/レンタサイクル10分/タクシー5分

お車で：圏央道「市原鶴舞IC」より約5分

高速バスで：東京駅・羽田空港・横浜駅より約1時間

(市原鶴舞バスターミナルよりタクシー 約5分)

※不定期で、市原鶴舞バスターミナルと美術館間を無料送迎バスが運行します。決まり次第、美術館HPにてお知らせ致します。



広報についてのお問い合わせ

市原湖畔美術館 担当：鶴谷、宮内

tel: 0436-98-1525 fax:0436-98-1521

press@lsm-ichihara.jp www.lsm-ichihara.jp